

発達遅滞児とくに精神遅滞児の早期療育の効果はいくつかの研究においてたしかめられている。しかしわが国においては精神遅滞児の0歳からの早期療育はまだ普及しておらず、しかも療育技術の標準も未確定の状態である。そこで、本研究グループにおいて精神遅滞児の早期療育技術の標準を確立し、その普及の方法について研究をすすめることとした。

1. 本年度の研究結果

発達遅滞児とくにダウン症をはじめとする精神遅滞児の早期療育についてこれまでの研究の成果をまとめ、今後の研究の方向づけを行った。そこでまず本年度の研究結果をまとめることにする。

①発達障害児の超早期療育（高松鶴吉）

M R児は乳児期は運動遅滞を主訴として来院し、2才頃には言語発達遅滞を主訴として来院する。運動を育て、言語を育てることによって精神遅滞児の将来予測像の改善をはかって来た。今後はさらに精神遅滞児に対する運動発達、言語発達の促進法を細かく手順化する計画である。

②精神発達遅滞児の早期訓練（石原昂ほか）

精神発達と運動発達には相関があり、精神遅滞児に対する運動療法を早期に開始することによって精神発達に好ましい影響を及ぼしうると考えられる。これまで運動療法の対象児のうち28.5%が精神遅滞児であった。運動療法開始時の年齢が1才6カ月未満とそれ以後のものとを比べると、早期に訓練を開始したもののほうが発達速度が早い傾向がみられた。今後は精神遅滞児に対し運動療法のみでなく、多面的な働きかけを行い、その方法を確立し、あわせて効果について検討する。

③ポーター乳幼児教育プログラムによる発達遅滞乳幼児に対する早期訓練（山口薫） ポーター乳幼児教育プログラムによる訓

練を発達遅滞乳幼児78例（うちダウン症60.7%）に適用した。指導開始月令が早いほどDQの上昇勾配は大きいようであったが、その推移には個人差が大きかった。今後、障害のタイプ、指導開始の月（年）令、指導頻度、親の養育態度、によって効果に差があるかどうかを検討する。

④ダウン症児の超早期療育の効果判定（長畑正道、池田由紀江）

筑波大学方式 early stimulation program をダウン症児に適用し、これまで次のような結果を得た。DQは従来のダウン症児の標準より高いレベルを維持し、発達 milestone の達成時期は、生後0～6カ月の早期に訓練を開始した群は、生後19～24カ月のおそい時期に訓練を開始した群、に比べて早かった。今後、就学年令まで訓練を続けた効果を検討すると同時に、発達評価の方法について検討する。

⑤発達遅滞児の運動発達に対する早期治療の効果について（北原 信）

発達遅滞児に対してリハビリテーションの立場から治療を行いその効果を検討する。とくに運動発達について「引きおこし反応」をとり上げ、運動発達遅延に対する治療法がいかなる点に変化をもたらすのかを検討する。

⑥通年療育体制の問題点と社会資源の活性化

— 自閉的傾向をもつ児と運動療法をモデルに（武貞昌志）

発達障害児の早期発見・早期療育の現行のシステムにさまざまな問題点が見出された。今後、このシステムの改善をはかる方策について検討する。また自閉的な子どものさまざまな運動療法の効果を、肥満児、喘息児と対比した結果、身体イメージの形成の促進、感覚と運動機能の統合が促され、コミュニケーションの成立や社会適応性の向上に役立っていたことが判った。しかし、前述の運動療法の方法は必ずしも科学的なうらづけに乏しく、就学前の療育プログラ

ムの確立を今後はかって行く必要がある。

2. 早期療育技術研究グループとしての今後の課題

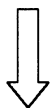
本研究グループは、リハビリテーション医学に基礎をおく早期療育と、教育学に基礎をおく早期療育、とに大別される。そこで、かかる考え方あるいは技術上の差が果してその効果に影響を及ぼすのかどうかを検討することが必要である。そこで、グループ全体として共通の尺度で効果を判定することとした。従来それぞれの研究者が用いてきた判定法に加え、Bayley Scale for Infant Development を共通の尺度として採用することとした。この Scale は Mental および Motor に分けて発達を評価できるので、療育方法の違いによって、いづれの面により大きな差がでるか推察することが可能である。

しかし、療育技法については、できるだけ各研究者の独自性を尊重することとした。以上のような判定結果を参照しながら、今後、精神発達遅滞児はさまざまな場で早期療育をうけることになると考えられるが、どの方法がどのような場で最も適当であるかを明らかにしていく計画である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



発達遅滞児とくに精神遅滞児の早期療育の効果はいくつかの研究においてたしかめられている。しかしわが国においては精神遅滞児の0歳からの早期療育はまだ普及しておらず、しかも療育技術の標準も未確定の状態である。そこで、本研究グループにおいて精神遅滞児の早期療育技術の標準を確立し、その普及の方法について研究をすすめることとした。